角幡唯介（左）と三浦英之（右）。茅ヶ崎市開高健記念館の庭にて。

Part 1
ノンフィクションに生きる

なぜ、ノンフィクションなのか。探検、社会の闇、
組織、秘境の文化、人物……多様な題材に魅せられた書き手たちが、
それぞれの言葉で「ノンフィクションに生きる」ことの意味を語る。

ノンフィクションは「届かない」か？

対談　角幡唯介（探検家・作家）×三浦英之（朝日新聞記者・ルポライター）

朝日新聞記者から開高健ノンフィクション賞受賞を経て、ノンフィクション作家に。その後もコンスタントに作品を発表し、数多くの賞を受賞する角幡唯介と三浦英之。経歴こそ重なるが、テーマも作風も異なる二人が初めてノンフィクションについて語り合う。

角幡　三浦さんは覚えていらっしゃらないと思いますが、朝日新聞時代に、二度お会いしています。一度目は、僕が入社三年目、富山支局にいたとき、東京の社会部にいらっしゃった六年目くらいの三浦さんが富山に来られることがあって挨拶しました。ただ、会う前から僕は三浦さんのことを知っていた。デキる記者として有名だったからです。

三浦　今日は角幡さんと対談できるというので嬉しい反面、自分では忘れてしまっている過去を知られているので、恐ろしい。僕は同僚内では〝元出世頭〟と呼ばれていて、今は完全にドロップアウトしたので〝元〟なんだけど、当時はきっと、トレンチコートの襟を立てて、偉そうに歩いていたんじゃないかと思うと……。

角幡　いや、すごく腰が低い方だなあという印象でしたよ。二度目が、東京社会部の政治資金班に、応援のために集められたときです。

三浦　僕がリーダーを務めた取材班でした。

角幡　そうだったんですね。僕はもう会社を辞めるつもりだったので応援取材というのはどうもやる気が出なくて、特にネタも見つからないし夜になると酒場にくりだしていました。そうやって遊んでいるときにも、共有メールに、三浦さんの取材メモがバンバン送られてくるんです。情報量がすごくて、どうやったらこんな取材ができるのかと、強烈なインパクトがありました。

三浦　当時は忙しすぎて、角幡さんの印象がちょっと薄かったのかもしれません。僕から接点を持ったのは、二〇一三年、巨大台風に襲われたフィリピンのレイテ島のルポを書くことになったときです。部長から、作家でも識者でも誰か一人、取材に連れていっていいと言われたので、「角幡さん！」と即答しました。角幡さんが開高健ノンフィクション賞を受賞して、青春三部作（『空白の五マイル』『雪男は向こうからやって来た』『アグルーカの行方』）が売れて、あっという間にスター作家になっていたころです。「初めまして、三浦英之と申します」と依頼メールを送ったら、返ってきたのが「三浦さんと会うのは初めてではありません」という返事。顔から火が出るくらい恥ずかしかった。

角幡　あのメール、三浦さんが直接書かれたん

構成＝砂田明子　撮影＝幸田 森　撮影協力＝茅ヶ崎市開高健記念館

日本のノンフィクションを牽引する二人の対談は、茅ヶ崎市の開高記念館にて終始和やかな雰囲気で行われた。

でしたっけ。

三浦　もちろん。で、見事に断られました。都合がつかないし、フィリピンには興味もありません、という回答でしたよね。ところが三年後に『漂流』が出て、ひっくり返った。「おい！フィリピンが舞台じゃないか！」と（笑）。

角幡　フィリピン行ってました（笑）。漂流したマグロ漁師を取材することになって、その人がたまたまフィリピンのほうにたどり着いたのでフィリピンに取材に行ったんです。

ノンフィクションは「届かない」

三浦　僕は角幡さんが自身の冒険を書いた作品が大好きで、ヒマラヤに登り北極に行く、その行動力に驚嘆するとともに、冒険をここまで言語化できた作家って角幡さんしかいないんじゃないかと思っています。同時に角幡さんは取材者としても凄い。『漂流』では、実際に漁船に乗ってマグロの頭までかじって。そこまで取材できる人っていないですよ。

角幡　僕が出した本の中では、『漂流』と『雪男は向こうからやって来た』が取材して書いたものです。『漂流』を書いたことで、取材して本を書くのは自分には無理だなと思ったんです。

三浦　そんなことはないでしょう……。

角幡　いや、本当に。やっぱりどこか落ち着きが悪い。自分の体験でない以上、どんなに深掘りできても、結局、解釈の域を出ない。マグロ漁師の話であれば、沖縄の伊良部島・佐良浜に独自の漁村文化があって、その文化を骨の髄まで沁み込ませたマグロ漁師が、その文化的なやり方のなかで漂流するわけです。彼らが見た景色や風土、歴史にものすごく興味があったので時間をかけて取材をしたし、海や漁村文化の深いところまで掘り出せた自負もあった。村の人にも喜ばれましたよ。それなりに負の部分も描いているんですが、自分たちの漁師文化をこうやって言語化してくれた人はいなかったと。皆さん苦労されて生きてきたから。

だけど自分の中には、一定の達成感はあるものの、腑に落ちないところがあった。結局のところ、佐良浜で生まれ育ってマグロ漁師にならなければ彼らの気持ちはわからないわけで、一言で言えば「届かないなあ」っていう思いが残ったんです。やっぱり自分の経験を書いたほうが自分自身に対して説得力のある言葉を見つけることができる。それ一本で行こうと思い定める契機になったのが、僕にとっての『漂流』ですね。

三浦　『漂流』が素晴らしい作品なのは間違いないですが、ノンフィクションの魅力って、今出た「届かない」ことだと思うんです。

角幡　それはそうかもしれない。

三浦　小説だったら、自分が書きたいことをすべて書けるのかもしれない。でも取材して書くノンフィクションには、絶対に届かない領域があって、震災の取材にしても、人物の評伝にしても、一〇〇パーセント対象になり切ることはできないから、「届かない」んです。だからこそ、どこまで近づけるかが勝負になり、読者はその覚悟や粘りに手に汗握るわけで、『漂流』なんて、ギリギリまで接近していますよね。

角幡　自分でも漂流しようかと思いました。じゃないと、漂流した人の内面はわからないから。

自分の中に深く分け入っていくノンフィクション

角幡　結局、僕は身体的な経験がともなわないとストレスを感じるんですよ。身体で世界を感じたときに生まれ出てくる言葉、それを見つけるために旅をしているようなところもある。言葉って不思議なもので、腑に落ちる言葉を見つけると、それで世界が深まりを増したり、自分の生き方や行動の理由がわかったりもする。そういうのを求めているんでしょうね。

三浦　角幡さんは、ご自分の冒険を書いた作品でも、チベットなり北極なりを書いてはいるんだけど、最終的には自分の〝内面〟を書いていますよね。ベクトルが常に内側に向いている。その最たる作品が傑作『極夜行』だと思います。

連載時のタイトル、「太陽が昇らない」が僕は好きでした。文字通り太陽が昇らない漆黒の世界をたった一人で探検して数カ月を過ごす。これ、ノンフィクションにはきわめて向いていないテーマですよね。ノンフィクションって普通は自分が見たもの、人から聞いた話をもとに構成していくのに、『極夜行』では世界は何も見えず、見えるのは唯一、自分の心の中だけ。自分の中に深く分け入っていくこの本は、ノンフィクションであると同時にフィロソフィーになっている。この本に限らず、角幡さんは文章がものすごく上手で、もう〝角幡文学〟の域になっている。書き手に大きな影響を及ぼしたノンフィクションだと思います。

角幡　そうだとしたら嬉しいです。

三浦　そして、そこには批判も含まれている。目に見えるものしか書いてない書き手への批判。

この続きは本誌でどうぞ！